

## 「東アジアの伝統文化・民間工芸美術 ——その保存と展示」の開催

大塚 秀高\*・三山 陵\*\*

会議名：博物館・美術館関係者国際会議

「東アジアの伝統文化・民間工芸美術——その保存と展示」

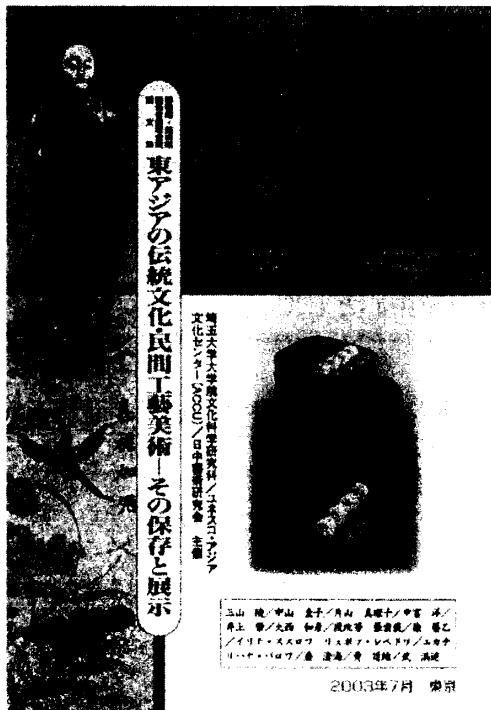
会期：2003年7月20日（日）10:00～17:00

7月21日（月・祝日）10:00～18:00（懇親会19:00～20:30）

会場：文京シビックセンター 26階・スカイホール（東京都文京区春日1-16-21）

会議内容：第1部「報告 博物館における保存と展示の現状」

第2部「座談会 民間工芸美術の保存・展示の問題点」



会議当日に配布された予稿集

### はじめに

埼玉大学大学院文化科学研究科は、平成15年7月に日中藝術研究会（東京 事務局長・三山陵）、財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）（東京）との共催により、下記のとおり国際会議を開催した。本会議は、本研究科の博士後期課程の新設を記念し、ACCUの国際教育交流事業の一環としておこなわれた。

会議のテーマは、新設課程の「東アジアの相互理解と地域社会に貢献する」趣旨に鑑み、「東アジアの伝統文化・民間工芸美術——その保存と展示」とした。すなわち、民間工芸美術品を収蔵・研究する博物館・美術館・研究所の研究員・学芸員ら各国の関係者を一堂に会し、相互の理解を増進し、さらに今後の保存・展示に役立てるための学術交

\* おおつか ひでたか、埼玉大学教養学部教授、中国文学  
\*\* みやま りょう、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程在学、日中藝術研究会事務局長、中国美術

〈会議プログラム〉

●第1日目 7月20日(日) 10:00開場 受付開始

◎開会式(司会・大井 剛)

主催者挨拶(財)ユネスコ・アジア文化センター理事 宮内盈義  
埼玉大学大学院文化科学研究科長 関口 順

招聘者紹介

◎第1部・報告(司会・午前/大塚秀高 午後/高久健二)

◇ベトナム・フエの伝統工芸美術について

.....報告/フィン・ディン・ケット(黄廷結 ベトナム) 通訳/大西和彦

◇サンクト・ペテルブルク人類学民俗学博物館所蔵の朝鮮・中国の工芸美術品について

.....報告/イリナ・ススロワ, リュボフ・レベドワ(ロシア) 通訳/佐々木照央

◇和菓子の資料室 虎屋文庫の活動

.....報告/中山圭子

◇文明の伝承と継続——私たちのコレクションの履歴と保存

.....報告/段改芳, 張宗載(中国) 通訳/陸偉榮

◇高麗美術館の展示と保存について——朝鮮屏風修復事業から

.....報告/片山真理子

◇ゾウの造紙からドンホー版画のできるまで

.....報告/ブー・ホン・トゥアット(武洪述 ベトナム) 通訳/大西和彦

◇堤焼の資料保存と展示——ある窯元の事例を中心に

.....報告/中富 洋

●第2日目 7月21日(月・祝日) 10時開場 受付開始

◎第1部・報告の続き(司会・午前/初山明 午後/大塚秀高)

◇ベトナムの上岸聖母信仰と民間美術

.....報告/大西和彦(在ベトナム)

◇エルミタージュの日本コレクションについて

.....報告/エカテリーナ・バロワ(ロシア) 通訳/佐々木照央

◇ベトナム・フエの博物館——展示と保存の活動

.....報告/ファン・ティン・ハイ(潘清海 ベトナム) 通訳/大西和彦

◇埼玉県博物館における保存と展示——

「赤物」「押絵羽子板」関係コレクションを中心として

.....報告/井上 肇

◇南京博物館の民族民俗文物蒐集・整理について

.....報告/徐藝乙(中国) 通訳/管懷賓

◇民間美術の収蔵記録について——

「李朝民画」として収蔵された中国民間版画を例として

.....報告/三山 陵

◎第2部・座談会「民間工芸美術の保存・展示の問題点」

座長/高久健二

専門家助言者/増田勝彦

報告者と関係者を中心に意見の交換

◎閉会の挨拶

埼玉大学大学院文化科学研究科長 関口 順

◎懇親会 19:00～20:30

流・情報交換の場とすることを目的とする。

博物館・美術館が直面している問題の一つは、現在、燻蒸剤として使用されている臭化メチルが2005年から使用禁止となることが決まっているにもかかわらず、これに替わる燻蒸剤が開発されていないことにある。だが、燻蒸の問題以前に、「保存・展示」の基本にかかわる諸問題が山積している。

国際会議開催の広報は、大学のホームページ、インターネットの関連サイト、ポスター、チラシ、埼玉県の博物館関係の会議などでおこなった。広報の対象は、博物館・美術館・研究所の関係者、博物館学コースを専攻する学生、この方面に関心を持つ社会人一般としたが、広く周知徹底を図った結果、幅広い層からの参加を得た。2日間の会議の参加者はのべ160人をうわまわり、関東各県をはじめとし、北は宮城・新潟から、石川・京都・奈良・大阪、さらに南は九州の福岡からの参加もあり、会議の主題の今日性をあらためて認識させられた。

以下では、会議の概要を、趣旨・内容・進行・成果などに分け、順次報告したい。

## 1 会議開催の趣旨

庶民の暮らしの中で消費・生産されてきた工芸品・美術品とそれに関わる諸技術（以下ではこれを「民間工芸美術」とよぶ）は、人々の生活と心に深く根をおろし、社会と密接な関係をもっている。しかし、生活の変化にともない、このような民間工芸美術は、いまや失われゆく「文化遺産」となりつつある。

民間工芸美術は、伝統文化の重要な一分野であり、また民俗・習俗を理解するうえで貴

重な実物資料を提供するものであるが、美術・工芸・民俗など関連する学問領域の狭間にあって、これまで主たる研究の対象にはされてこなかった。しかし、日本各地の博物館には、国内の民間工芸美術はもとより、国外のそれをあわせ収蔵する館が少なくない。近年は特に、異文化理解が重視されるにともない、東アジアの民間工芸美術の収蔵数が増えていると聞く。だが、受け入れ側の体勢がこの変化に十分対応できているとは言い切れないのが現状である。

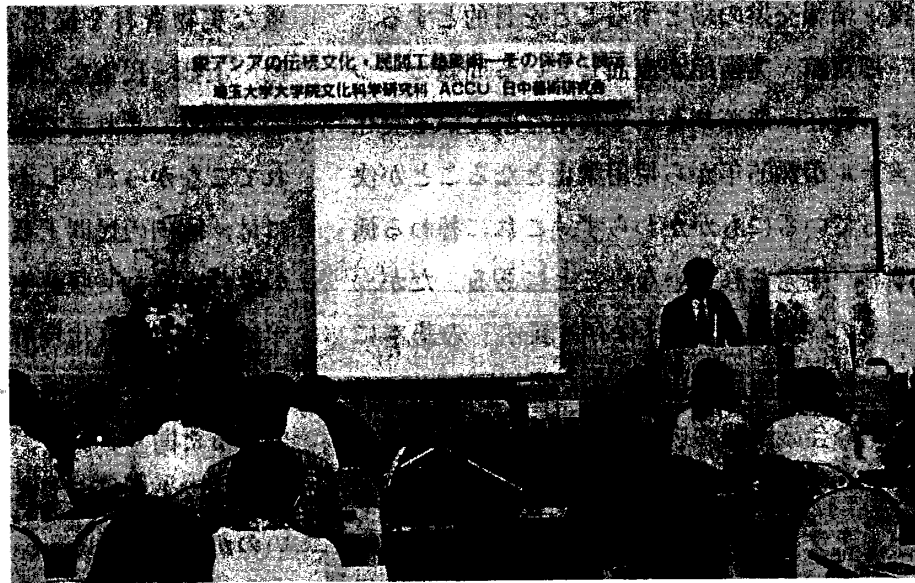
民間工芸美術には、制作の「技術の伝承」という問題のほかに、過去および現在の実物資料をいかに後世に伝えるか、という「実物資料の保存」という問題がある。この2つの課題は、次の3点に集約できる。

1. 蒐集し収蔵している実物資料を損ねることなく保存すること。
2. 民間工芸美術がいかに生活の中で消費されてきたか、そしてそこに込められた意味は何かを記録し、伝えること。
3. 生活の中で生きている状態で技術を伝承していくこと。

第1の点は、資料の材質に関わる。民間工芸美術は紙・布・木材・ワラなど、虫の被害を受けやすいものが使われることが多く、彩色面でも退色・脱色しやすい材料が使われているからである。彫塑や絵画などの純粋美術作品に比し、素材の特徴が一律でない分、保存には複雑で微妙な管理が必要なのである。

第2の点は、収集・保存の際の記録の問題に関わるが、展示方法にも影響を及ぼさずにはいられない。民間工芸美術の消費形態、その背景となる社会についての詳しい情報が記

録保存されていれば、それを展示に活かすことができる、参観者に、単なる「物体」を展示するのではなく、伝統文化の中、民俗の中での民間工芸美術の様相を、生きたかたちで呈示することが可能になるからである。残念ながら、数あるコレクションの



開会の挨拶をする関口順教授

なかには、収集の記録を伴わないものや、その記録を失ったものも少なくない。これらは、将来、生産地もわからず、用途も不明な、単なる「物体」になるおそれがある。

第3の点は、民間工芸美術を単に過ぎ去った時代の記録や遺産とするのではなく、現在の生活に根ざしたかたちで活かしてゆくこと、と言い換えることができよう。

東アジア文化圏では、それぞれの地域ごとに特色ある民間工芸美術が生産・消費されてきた。それらは多くの共通点をもっている。今次国際会議では、東アジア地域の民間工芸美術を収蔵する博物館・美術館が、各地域の民間工芸美術を紹介し、各自所蔵の民間工芸美術を報告し、互いに理解しあうこと、各館の経験を持ち寄り、抱えている問題点を提示・検討することを第一の目標とした。

## 2 会議の概要とプログラム

会議は、各地の博物館・美術館関係者による現状と課題の個別報告からなる第1部と、第1部の報告者に専門家・関係者を加えたメ

ンバーによる第2部・座談会からなる、二部構成とした。

会議で使用された言語は、日本語・中国語・ベトナム語・ロシア語で、そのすべてが逐一他の言語に通訳された。

会議当日には予稿集を全参加者に配布し、短い報告時間で言及しきれない部分を補った。予稿集はA4判106頁、カラーの表紙、墨一版の本文からなり、原稿に使われた言葉は日本語・英語・中国語であった。

報告は、スライドフィルム・ビデオテープ・オーバーヘッドカメラなどの映像資料を中心に進められ、報告の後に質疑応答の時間が設けられた。

会議の司会は、埼玉大学教養学部の大塚秀高・舛山明・高久健二が担当し、ロシア語通訳は佐々木照央が担当した。中国語通訳は埼玉大学教養学部非常勤講師陸偉榮が担当した。

## 3 会議の進行

2日間にわたる会議は、東京都文京区春日



閉会式で紹介される  
ロシアのイリナ・ススロワ氏

「初めに、来日された外国研究者を心から歓迎します。これを機に、日本文化に対する理解を深めて欲しいと思います。埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程の新設をお祝いいたします。課程の内容にふさわしい国際会議が開かれたことをうれしく思います。

また、共催者の日中藝

にある文京シビックセンター26階にあるスカイホールを会場としておこなわれた。文京シビックセンターは、区役所・区民ギャラリー・生涯学習センターなどがおさまる、文京区の、一般に広く開かれた文化施設である。交通は至便で、恵まれた条件にある。会議終了後の懇親会も、会場の模様替えをして、同ホールで挙行された。後楽園に隣接するスカイホールからは、眼下に東京ドーム、遠くには新宿副都心などが眺望でき、凝縮した内容の会議のあいま、窓外の景色が参加者にいこいを与えた。

以下は、会議の進行次第の紹介であるが、第1部・報告部分については、便宜上、2日分の内容を、報告者の国別にまとめ、第1日の開会式の後に記した。この点、あらかじめ御承知おきいただきたい。

●会議第1日 7月20日(日) 10:00~17:00

◎開会式

開会式の司会は、事業共催者ACCUの大井剛氏が担当した。まずACCU理事の宮内盈義氏から次の趣旨の挨拶があった。

術研究会の永年にわたる研究活動実績により、今次会議が実現したものであることも付け加えさせていただきます。会議開催の目的が達成されることを期待します。」

次に、埼玉大学大学院文化科学研究科を代表して、教養学部長であり文化科学研究科長でもある関口順が、以下のごとき主旨の挨拶をおこなった。

「埼玉大学大学院文化科学研究科は本年4月に新設されました。文化科学研究科のこれまでの実績の基礎の上に、地域文化への貢献と、アジア地域における国際的貢献とをめざしています。文化行政・文化関係の専門職業人をおもな対象としており、本年の入学者にも、文化界や文化行政ですでに実績を有する人材がいます。このたび新設を記念して、博士後期課程の専攻『日本・アジア文化研究』の内容にあわせ、『東アジアの伝統文化・民間工芸美術——その保存と展示』をテーマとする、博物館・美術館関係者の国際会議を開催いたします。助成をいただいたACCUならびに日中芸術研究会、また参加者の方々にお礼を申し上げます。」

最後に、司会の大井剛氏が、外国人研究者一人ひとりを、ベトナム語・ロシア語・中国語、それぞれの母国語で紹介し、国際会議の雰囲気を高めた。短時間ではあったが、緊張した式をなごやかに演出し、参加者には好評であった。

続いて、第1部・報告の午前の部を司会する大塚秀高が会議の進行方につき説明をし、いよいよ会議が始まった。

### ◎報告の内容

#### ◆ベトナム

ベトナム中部に位置する古都フエにおける博物館と民間工芸美術についての報告と、首都ハノイにおかれる民族学博物館の伝統文化調査保存事業（伝統造紙と民間版画）、ならびに民間信仰における民間工芸美術の紹介がなされた。

#### ◇ベトナム・フエの博物館——展示と保存の活動

報告／ファン・タイン・ハイ  
(潘清海 フエ古都遺跡保存センター)

The Activities of Exhibition and Conservation in Hue, Vietnam

PHAN Thanh Hai (Hue Monument Conservation Center)

ベトナム中部に位置するフエは、ベトナム歴代王朝最後のグエン朝（1802～1945）の都であり、1993年にユネスコにより世界遺産に登録された。

フエ地域の文化は、北方の中国文化と南方のインド・チャム文化、そしてベトナム民族の文化が融和して形成された。

フエにおける近代的保管活動は、百年ほど前にフランス人の影響下に始まった。1923年

に開設されたカイディン博物館は、グエン朝宮殿の建物の一つが使用された。1975年以前においては、インドシナ地域における最も権威ある大規模博物館の一つであった。現在は、フエ宮廷美術博物館となっている。

主要な博物館は、このほかに先史古代の遺跡と20世紀革命運動に関する資料・史跡の管理保存をするフエ地域博物館、民間文化と伝統的工芸美術の展覧と宣伝をするフエ市博物館（別名、民俗文化博物館）がある。

#### ◇ベトナム・フエの伝統工芸美術について

報告／フィン・ディン・ケット  
(黄廷結 フエ市博物館)

The Traditional Handicrafts of Hue

HUYNH Dinh Ket (Hue City Museum)

古都フエにおける民間工芸美術は、王朝の需要に応えつつ、庶民の生活用具も生産してきた。手工藝品とその職人がフエに集中するにつれ、もともとは農業地域であったフエの都市化が進展した。

17世紀から現在まで使用されている庶民の遊具——紙牌（花札・トランプのようなもの）は、木版の手刷りである。紙牌には中国人・日本人・西洋人・アラビア人などが描かれている。これはフエの南の港・ホイアンなどで外国との交易が盛んであったことを物語っている。

フエの伝統工芸美術は、体系的な研究が進んでおらず、博物館が収集した民間工芸美術品の保管業務に関しては、改善すべき点が山積している。経済的な基盤の強化を図らなければ、民間工芸美術の伝統技術は、早晚失われるであろう。



外国との盛んな交易を物語る木版印刷の紙牌の図柄

◇ゾウの造紙からドンホー版画のできるまで  
報告・ブー・ホン・トゥアット  
(武洪述 ベトナム民族学博物館)

From Do Paper to Dong Ho Folk Prints  
VU Hong Thuat (Vietnam Museum of  
Ethnology)

ベトナム民族学博物館は、プロジェクトを組んでベトナム北部における伝統的造紙の調査を続けている。伝統的な製紙は、ゾウdoの木皮の皮を使い、手で漉かれる。この伝統手

漉き紙は、ゾウ紙と呼ばれ、絵画や版画の紙として需要がある。当博物館では、この紙を、資料を包み保存するのに使用している。

ベトナム民族学博物館では、ゾウ紙を使った民間版画の製作についても調査しており、実演展示もしている。このような博物館活動は、伝統技術を持つ職人に、伝統文化を守るという意識を強く目覚めさせた。

伝統民間工芸美術に携わる職人が持つ知識は、豊富である。博物館の任務は、これらの知識の「データバンク」となることであろう。この分野に取り組むには、博物館学だけでは不十分であって、社会科学・自然科学の諸分野との関係が不可欠となる。

◇ベトナムの上岸聖母信仰と民間美術

報告／大西和彦

(在ベトナム ベトナム宗教史研究)

Vietnamese Folklore Sources Concerning the  
Belief in Thanh Mau Thuong Ngan

ONISHI Kazuhiko

ベトナムの民間信仰の一つである「上岸聖母信仰」と、その中に見られる民間工芸美術についての考察である。「上岸聖母信仰」は一種の「女神信仰」で、1950年代にフランス極東学院のモーリス・デュランMaurice DURANDが研究成果を公刊している。しかし、南北ベトナム統一(1976年)後から1989年のドイモイ(経済革新政策)までは、迷信とされ、あまり研究がなされなかった。ドイモイ以後は、信仰が認められ、活動も盛んである。

上岸聖母信仰と関わる民間工芸美術品で一番美しいものは、祭壇に捧げられる「山荘洞 Dong Son Trang」というお供えである。これは、山や洞窟を石膏でかたどった大型の模

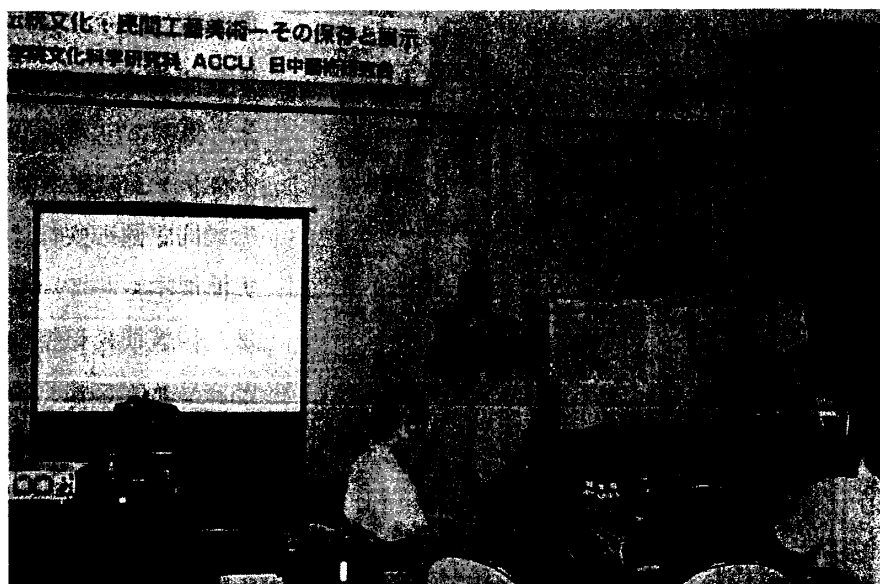
型で、神々の周囲に紙で作った樹木・動物・果物などを配するものである。

手間をかけて作った供物や祭器も、儀式が済むと燃やされてしまう。どんなに美しい供物であっても（それは立派な藝術品・民間工芸美術なのであるが）、後には全く形を残さないのである。

上岸聖母信仰はキム族（京族）の山地開拓と密接な関係を有する可能性が大である。しかし、これを確定する資料は、現時点では未発見である。信仰概念を具象する祭壇・祭器・供物などの蒐集・保存・分析は、研究方法の一つとして有効であろう。

#### ◆ロシア

ロシアのサンクト・ペテルブルクにあるエルミタージュ美術館と人類学民俗学博物館（クストカメラ。以下クストカメラという）の2つの博物館から、アジア——特に日本と中国——の収蔵品を中心に報告があった。歴代皇帝の居城であったエルミタージュと、1714年に開設されたクストカメラは、どちらも歴史的建築物である。古い建築が生きた形で実見できる点では有意義であるが、博物館の機能の上からは、諸々の問題がある。特に展示と保存の面では、不向きな建物である。この展示と保存の問題は、会議最終日の座談会でも討議された。



ビデオ、スライド、OHCを使った報告。報告者はベトナムの民間信仰と民間美術の関係を紹介した大西和彦氏

#### ◇エルミタージュの日本コレクションについて

報告／エカテリーナ・バロワ  
(エルミタージュ美術館)

#### Japanese Collection of the State Hermitage Ekaterina VALOVA (The State Hermitage)

ロマノフ王家の美術コレクションを基にしたエルミタージュは、世界中の美術品を収蔵している。中でもヨーロッパ美術の収蔵は、広く世に知られており、世界から集まる参観者の多くが、レオナルド・ダ・ヴィンチをはじめとするヨーロッパ絵画・彫刻の展示室に集中する。特に印象派・後期印象派の展示室は、人気がある。

今回の会議では、ふだんあまり注目されない日本コレクションについて、報告があった。日本コレクションには、陶磁器・刀剣・根付け・浮世絵などが含まれる。なかでも浮世絵収蔵は、日本の浮世絵界では広く知られるところであり、本会議においても、その蒐集ルートや保存方法が、参加者の関心を集めた。



◇サンクト・ペテルブルク人類学民俗学博物館収蔵の朝鮮・中国の工芸美術品について  
報告 / イリナ・ススロワ

リュボフ・レベドワ  
(サンクトペテルブルク人類学・民俗学博物館) [クンストカメラ]

Early applied arts of Korean and Chinese collections in the Kunstkamera Museum of St. Petersburg

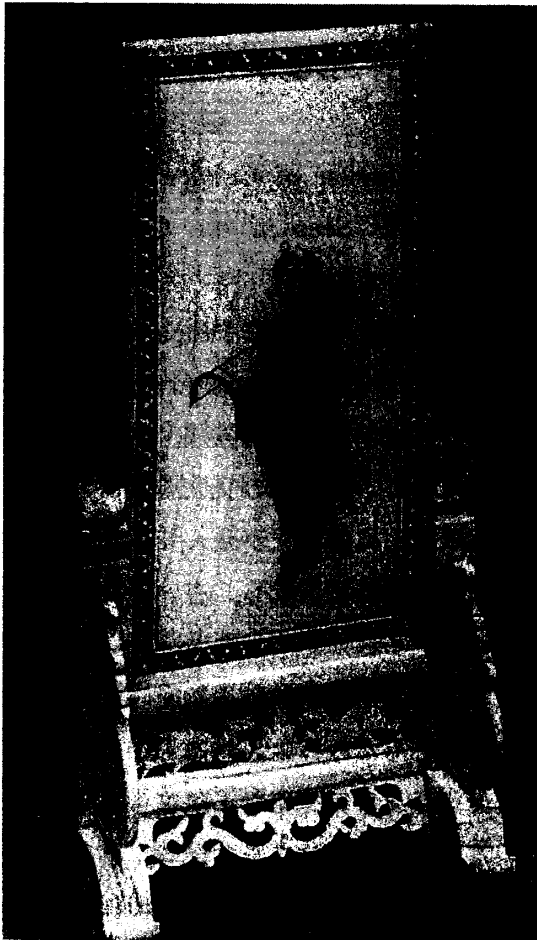
Irina SOUSLOVA and Liubov LEBEDEVA  
(Peter The Great Museum of Anthropology and Ethnography of the Russian Academy of Sciences) [Kunstkamera]

18世紀はじめ、ピョートル大帝（在位1682～1725）は、サンクト・ペテルブルクを造営した。造営初期の1714年に、クンストカメラ

も建設された。民族民俗博物館としては、世界で最も古い。ピョートル大帝の博物学的コレクションに始まり、対外貿易や領土拡張を目的に派遣された調査団が持ち帰った物を、多数収蔵している。

ピョートル大帝自身のコレクションは、当時流行した奇形児や奇形動物の標本が有名である。日本の資料は、18世紀中期からのものを収蔵している。1891年に来日したニコライ皇太子（のちのニコライⅡ世 在位1894～1917）へ、明治天皇から贈られた鎧兜も収蔵する。特にアイヌに関する資料は豊富である。日本コレクションは、数量が多いので、今回の報告からは除外した。

ロシアに領土を接する清国に対して、南に進出しようとするロシア帝国は、多くの探検



クンストカメラが所蔵する中国製の象牙の衝立



衝立の図が参考にしたと思われる『水滸葉子』（17世紀に出版されたもの）

隊・調査団を派遣した。今次会議では、彼ら調査団が蒐集したなかから、中国と韓国の収蔵品について報告があった。さらに、報告の最後では、意味が不明の収蔵品が提示され、参加した専門家の意見が求められた。それは、中国製の顔や手に象牙を使った銀製の人形で、ゼンマイ仕掛けで動くものである。日本と中国の人形・玩具の専門家が参加していたが、類似の例はなく、用途・名称などは不明のままに終わった。中国国内にも伝世していない新しい事例であった。

収蔵品の象牙製の衝立については、参加者から貴重な情報が提出された。衝立には武者の図像が描かれているが、その図が参考にしたと思われる画集が示された。この画集は、『水滸葉子』という木版印刷物で、衝立の製造年代に近い17世紀初めに中国で出版されている。会議が情報交換の場として役立った一幕であった。

#### ◆中国

南京博物院（南京市）について、同院民族民俗研究所所長の徐藝乙が報告し、中国華北の山西省の民間美術の蒐集と保存について、山西省群衆藝術館の段改芳が発表した。中国のおおやけの博物館の歴史は浅く、蒐集が重視され、保存の意識が欠如しているのが現状である。それにひきかえ、個人の収蔵品は大切にされ、保存・展示に関しても細かい配慮がある。

#### ◇南京博物院の民族民俗文物の蒐集・整理について

報告／徐藝乙（南京博物院民族民俗研究所）  
Ethnological and Folklife-Related Source Materials Preserved at the Nanjing Museum

XU Yiyi (Institute of Ethnology and Folklore, The Nanjing Museum)

南京博物院は、中国の博物館としては歴史が古く、中華民国時代の1933年に設立された国立中央博物院を前身としている。設立当初から、民族・民俗資料の蒐集・研究が博物院の主要な業務であった。1950年代、つまり中華人民共和国初期には、イギリスに留学経験のある曾昭燏女史の指導のもと、民族・民俗資料は科学的な研究方法が採られた。これらの過去の実績の上に、現在も引き続いて系統的な資料の蒐集と研究がおこなわれている。このような成果は、展覧会やインターネット上で公開している。

#### ◇文明の伝承と継続——私たちのコレクションの履歴と保存

報告／段改芳（山西省群衆藝術館）  
張宗載（山西画院）

#### The Transmission of Culture to the Next Generation as Seen in the Collection and Preservation of Art

DUAN Gaifang (Shanxi People's Art State) and Zhang Zongzai (Shanxi Art Institution)

黄河の流域にある山西省は、歴史が古く、受け継がれてきた民間の文化も豊富である。沿海地域ほどに都市化が進んでいない分、生活習慣も民間工藝美術も、古いかたちで受け継がれている。

我々は、群衆藝術館や美術家協会に勤務していた関係もあり、個人的にも山西省各地で民間美術品を多数蒐集し、現在も蒐集を続けている。庶民の文化である民間工藝美術を次の世代に引き継ぐためには、その保存方法にも注意を払っている。寒暖の差が激しい山西省では、保管場所にいちばん神経を使う。夏

は日陰の倉庫に保管し、氷点下20度になる冬には、収蔵品を室内に移動させる。移動の際には、必ず黴と虫の発生がないかを確認する。防虫剤には、樟脳など天然のものを使う。

しかし、どんなに注意しても、小麦粉で作った「麵塑」miansu（小麦粉を水で練った粘土状のものを、手で丸めたり、ひねり出して動物・人物・花などを作り、蒸したものは、時間がたつと小麦粉の中から虫が発生する。現在のところ防禦策はない。

◆日本

規模は小さいが、特色ある博物館・美術館のキュレーターの報告と、地方における博物館活動について、地方行政の担当官から報告があった。また、最後に今次会議を企画した三山陵が、博物館・美術館における収蔵データの保存について問題提起をした。

◇和菓子の資料室 虎屋文庫の活動

報告／中山圭子（虎屋文庫）

The Activities of the Toraya Archives, Tokyo, Japan, in Preserving and Exhibiting Japanese Confectionery Source Materials

NAKAYAMA Keiko (The Toraya Archives, Toraya Confectionery Ltd.)

和菓子の老舗「虎屋」が開設するギャラリー「虎屋文庫」は、和菓子に関する文献資料およびその製造道具などを収蔵する。また、世界の菓子に関する資料も蒐集する。生の和菓子を展示する展覧会の特殊な展示方法や、菓子の保存に関しての実情を報告した。

◇高麗美術館の展示と保存について——朝鮮屏風修復事業から

報告 片山真理子（高麗美術館研究所）

The Task of Repairing Korean Folding Screens Preserved at the Koryo Museum, Kyoto, Japan

KATAYAMA Mariko (Institute of Koryo Art Museum)

朝鮮半島の美術・工芸品を収蔵する高麗美術館（京都）では、朝鮮式屏風を修復した際に、その日本式屏風との構造上の違いが明らかになった。屏風の構造の差異は、それぞれの気候の違いや、住居の環境に適応させた結果によるものと推察される。

◇堤焼の資料保存と展示——ある窯元の事例を中心に

報告／中富 洋（仙台市教育局）

The Preservation and Exhibition of Pottery Kiln: The Case of Tsutsumiyaki-Ware in Sendai, Northeastern Japan

NAKATOMI Hiroshi (Sendai City Board of Education)

東北の城下町仙台には、ほぼ250年間にわたり生産された民窯——堤焼があるが、現在は生産が途絶えている。その窯跡は、行政ではなく、一般市民の手によって保存・展示されている。

堤焼窯跡のギャラリーは、生産していた細工場（工房）をそのままの姿で残している。この細工場跡は、職人が戻ればすぐに生産が開始できるという状態にある。

この窯跡ギャラリーは、民間の力で作られた小さな博物館であるが、子どもたちの体験学習などの場として活用され、社会教育の拠点の一つともなっている。

永年、地元の民俗博物館に勤務した経験を持つ、仙台市教育局行政官による、民間の力を集めた保存事業の報告である。

◇埼玉県の博物館における保存と展示——

「赤物」「押絵羽子板」関係コレクションを中心として

報告／井上 肇（埼玉県立博物館）

A Few Examples of the Collection and Preservation of Folklife-Related Source Materials in Saitama Prefecture, Japan  
INOUE Hajime (Saitama Prefectural Museum)

埼玉県下には、有形民俗資料を保存・展示する博物館が4館ある。埼玉県立民俗文化センターは、人形製作で有名な岩槻市に、1980年に開設された。同センターは、日本で唯一の、民俗藝能と民俗工芸美術の保存と活用を設立趣旨とする、「わざ（技）の博物館」である。

同センターは、年中行事に使われた民間工芸美術、子どもの玩具などの関連資料、ならびに伝統工芸製作の道具や原材料・完成品・半製品・仕事の控え帳などを蒐集・収蔵する。また、生産の変遷や、職人が仕事を止めざるを得なくなった理由の聞き取り調査もおこなっている。

伝統工芸美術の消費が減少する理由の一つに、伝統文化を理解する購買層が減少していることが挙げられる。これは、博物館側の蒐集・保存、調査・研究、展示・公開のあり方に責任の一端が帰せられるかもしれない。

◇民間美術の収蔵記録について——「李朝民画」として収蔵された中国民間版画を例として

報告／三山 陵（日中藝術研究会）

Cataloguing Works of Art for Museums: The Case of Chinese Woodblock Prints Catalogued as Korean Paintings  
MIYAMA Ryo (Chinese Arts Research

Association of Japan)

時代の変化と共に、自国外の民俗資料を収蔵する博物館・美術館が増えている。これらを収蔵する際には、蔵品台帳作成と、収蔵データの注意深い記述が必要である。

1. 収蔵時のデータは出来る限り詳しく記録しておく。
2. データの更新がある場合は、前の記録を消去せずに残す工夫をする。
3. 異なる鑑定、見解も列記しておく。

現在ある情報を取捨選択することなく保存することは、研究が未開拓の分野では、将来への貴重な資料づくりとなるであろう。

●会議第2日 7月21日（月・祝日）

会議／10:00～18:00

懇親会／19:00～20:30

◎発表

前日に引き続き、6人の発表者が報告した。内容は第1日の項にまとめた。

◎第2部・座談会

座長：高久健二

発表者と会議出席者・助言者30人と、会議を聴講した参加者ら50人、総計80人が座談会に臨んだ。専門家助言者として招聘した増田勝彦氏（昭和女子大学大学院教授、元東京国立文化財研究所）は、保存技術の専門家である。増田教授は、2日間の会議の発表について講評したのち、博物館における保存の諸問題とその対処法を説明した。2005年以降の燻蒸剤・臭化メチル使用禁止に対応して、自然環境に近い保存法の試みなども紹介された。また、海外の情報が得られる文献、インターネットのウェブサイトが紹介された。



第2部の座談会。中央に座長の高久健二助教授。  
その右隣は助言者の増田克彦昭和女子大教授

座談会は高久の司会によって進められ、発表者は高久の求めに応じ、それぞれの館が抱える問題点や保存法が紹介された。短い時間ではあったが、情報交換・相互理解が深まる場となった。主な発言を次にまとめる。

#### ◇増田勝彦氏の話

民間工芸美術品は、文化財としての価値の高さに比べ、市場での価格が低廉なため、保存・修復などの基本的作業に必要なコストが低く押さえられる傾向がある。将来も純粋美術品ほどに高い経費がかけられる可能性は少ない。民間工芸美術を保存する際には、この点が考慮されるべきである。

最近の保存法の傾向としては、機械や薬品で人工的に管理するのではなく、立地に合わせた自然に近い状態で作品を守ろうという試みが見られる。すなわち、総合的な保存対策

という観点から、まずは保存環境を整えることから始めようという考え方に立ち、収蔵庫・書庫内のレイアウト・収納棚・収納箱の作り方などを、その館を取り巻く自然環境に合致させてゆこうというものである。生物被害が発生しない限りにおいては、自然の変化に順応した保存法をめざすものといいかえて差し支えあるまい。

なお、保存管理の問題は、館職員全員が関心を持ち、協力する必要がある。

#### ◇イリナ・ススロワ氏（ロシア）の発言

サンクト・ペテルブルクの冬の寒さは過酷である。倉庫の中は温度・湿度がコントロールされているが、展示室には空調設備がない。人が出入りすると外気が入りこみ、冬場は乾燥して湿度が低すぎ、収蔵品が傷む。

クンストカメラでは、これまで蒐集履歴が

重視され、保存管理は軽視されてきた。たとえば、中国の小麦細工（麵塑）の保存には、防虫剤を57年間使い続けている。最近、保存管理の大きなプログラムを作って、改善を検討し始めた。

◇フィン・デイン・ケット氏（ベトナム）の  
発言

フエ市博物館は、開館から日が浅いので、保管の経験が不足している。民間の保存知識にならって、伝統手漉きゾウ紙の袋に入れて保存している。

伝統的な保存法への質問に答えて。

フエにはほぼ300年前の紙が保存されている。その紙を保管していた容器はジャックフルーツの木材で作った箱で、吸湿剤として竹の炭を入れていた。その他の保存方法として、竹筒の中に竹炭とともに保管する方法もあった。フエ地方は、洪水が多発するので、保管場所は洪水の水位よりも高いところ、つまり家屋の梁や軒に吊した。重要なものは、

祭壇の上方の梁に吊したり置かれたりすることが多い。そして、1年に2回、開封して中を確認する。防虫剤は使わない。

◇ブー・ホン・トゥアット氏（ベトナム）の  
発言

民族博物館としては、実物展示や実演展示は臨場感を増すうえでも必要なものであるが、展示室の環境は、資料保存に適していない。傷まないものを展示するという限界がある。

◇小林すみ江氏（人形の吉徳資料室）の発言

展示と保存は相反するもので、頭が痛い問題である。現在のところ、よりよい解決法は見つかっていない。日本の伝統的倉庫・「蔵」の中の保存状況は良いが、コンクリートのビルの中は良くない。とくに、絹の着物や胡粉を使っている雛人形にとって、冷暖房の設備が保存状態を悪化させる。



会議後の懇親会で乾杯の音頭をとる岡崎勝世教授。  
その左は、司会の大塚秀高教授



報告者が持参した民間美術が、会場に展示された。手前から、菓子の木型、埴焼の壺と鉢、中国・山西省の刺繍品と麵塑、埼玉県の「赤物」という張り子や練り物の玩具、ベトナムの民間信仰に使われる版画、ロシアの織物など

#### ◎閉会の挨拶

主催者を代表して、埼玉大学大学院文化科学研究科長関口順が閉会の挨拶をして、会議は終了した。

#### ◎会場での展示

会議期間中、会場には各国発表者が用意した民間工芸美術が展示され、休憩時間には参加者の目を楽しませた。展示品について発表者が説明し、質問に答えるなどのやりとりがあり、実物に触れられたこともあって、理解がより一層深まった。

さらに、ユネスコ・アジア文化センターの関連書籍も展示され、ユネスコの事業に対する理解も深められた。

◎懇親会 19:00～20:30（文京シビックセンター・スカイホールにて） 司会／大塚秀高

主催者ACCUを代表して、大井剛氏が会議閉会の挨拶をした。会議開催の意義を簡潔明瞭に総括し、発表者・通訳者をはじめとする関係者一同に謝意を表した。

埼玉大学教養学部の前学部長・岡崎勝世が乾杯の挨拶をした。岡崎勝世は、会議開催の1週間前まで学部長兼文化科学研究科長の職にあり、今次会議の外国発表者の招聘手続きなど、埼玉大学における事務上の責任者であった。それゆえ、岡崎勝世の名前は、外国招聘者にとって印象深く、彼らからは、招聘を受けたことに対する謝意が示された。

会議は、2日間ともに日程が詰まっており、相互の交流はレセプション会場に持ち越されたかたちとなった。会議を通して培われた共同意識と共通の話題で、会場はあちこちに話の輪ができ、たいへん賑やかであった。この会議を機に、所属機関を越え、地域・国を越えた人のつながりが、新しく築かれたようである。

今次会議は、準備時間が短く、内容は「民間工芸美術の保存と展示」という過去に例のないものであったため、困難にもぶつかった。報告者たちには、難しい要求を乗り越え、責務を果たし、力を合わせて一つのことを成し遂げた達成感があふれていた。その充実感は、報告者のみならず、主催者・通訳者・会議出席者、そして傍聴した参加者にも共有された。懇親会は、予定の時間を半時間ほど超過して終了した。

## 4 会議の成果

会議開催の目的は大きく2つあった。一つは、東アジアにおいて共通の基盤を持つ伝統文化・民間工芸美術の紹介であり、もう一つは民間工芸美術の保存と展示の問題を提起し、その解決策を探ることであった。会議終了後の現在、この開催目的は基本的に達成できたと確信する。

保存技術の国際会議は、専門家により過去に数多く開催されているが、民間工芸美術を主たる対象として、この問題が提起されたことは、いまだかつて無かった。今次会議は、いままで軽視されてきた民間工芸美術・民俗資料を主対象とした点において、画期的なものであった。

東アジアにおいては、博物館の業務はいまだ文化資料の蒐集が主であり、その保存に配慮するまでに到っていない国もある。今次の会議の開催は、微力ながらも、保存や展示への配慮を喚起する作用を果たしたと信ずる。

燻蒸剤・臭化メチルが全面禁止になる2005年も間もない現在においても、いまだそれに代わる燻蒸剤は開発されていない。今次会議で明らかになったように、民間工芸美術の保存法も、これと同様模索の段階にある。自然の状態に近い保存法、伝統的な保存法など、今後のあるべき方向性が語られた。問題解決のためには、今後も継続的な情報公開・交換・交流が必要であろう。これは発表者・参加者一同が共通して強く望んでいることでもある。

会議を実施して得られた成果を以下にまとめる。

①いままで不足していた各国の伝統文化・民

間工芸美術の情報が得られた。

現在、ベトナムでは民間工芸美術が盛んに生産されている。だが、それを研究する者は多くない。それゆえ、公刊された民間工芸美術関連の書物は、ごく少数である。外国人が入手出来るものとなると、さらに限られてくる。わずかに『ベトナム民間絵画』、『ベトナム古版画』、『ベトナムの紙』、そして演劇とも関係がある『水上人形劇』などにすぎない。今次会議では、中部の古都フエの民間工芸美術や、ハノイ周辺の手漉き紙・手刷り版画などが具体的に紹介された。これは研究者・博物館関係者にとって、貴重な情報であった。

サンクト・ペテルブルクにあるエルミタージュならびにクンストカメラの東アジア関係の収蔵品にあっては、普段は展示されていないものも、写真ではあったが、見る事が出来た。日本人は、ヨーロッパの博物館・美術館に目を向けがちであるが、これとは逆に、ロシア帝国は極東・東アジアに並々ならぬ関心を寄せており、膨大な量の民俗資料を蒐集していたことが再確認された。

中華人民共和国では、いままで中華民国政府の業績を正当に評価することが控えられていた。このため、南京博物院の前身やその実績を知る機会は少なかった。民国政府の首都・南京に設けられた南京博物院の成り立ちとその収蔵品の来歴は、いまでのおおやけにされなかった。同博物院では、それを整理し、公表を予定しているという。今次会議は、その整理作業がほぼまとまったところで開催されたため、参加者は整理の成果をいち早く享受する形となった。

華北・山西省の民間工芸美術の種類は豊富で、日本においてもその一部を収蔵する博物



館・美術館がある。収集品の保存法が具体的に紹介されたことは、収蔵している館あるいはこれから収蔵する可能性がある館にとって、非常に参考になるはずである。

日本の民間工芸美術としては、地方の陶器生産と年中行事の飾り物が紹介された。また、特殊なものでは日本の伝統文化・和菓子とその製造道具が紹介された（会議場には和菓子の実物と、その菓子型が展示された。また、外国発表者には新鮮な生菓子が届けられた。和菓子の美と味わいを体感することができたことであろう）。

高麗美術館の収蔵品に関する報告は、気候風土の異なる地で製作される屏風の構造の違いと、その保存と展示に関し、示唆に富むものであった。

②民間工芸美術の保存と展示の重要性が改めて認識された。

考古資料や純粋美術品などの保存法は、研究が進みつつあり、保存技術もいろいろ開発されている。それに比べ、安価な民間工芸美術や民俗資料の保存は、長い間、軽視されてきた。現在、社会生活から姿を消しつつあるこれらの資料は、「生活文化財」としての価値が認められつつある。しかし、民間工芸美術・民俗資料の多くは、傷みやすい素材を使っているため、虫や黴の被害を受けやすく、保存が難しい。これら資料を収蔵する博物館・美術館の関係者は、少なからずその保存法に心を砕いているが、他館の情報などを知る場も機会もない状況にあって、解決策も見つからぬまま、いらだたしい日々を送らざるをえなかった。「民間工芸美術の保存と展示」をテーマにした今次会議は、問題意識を持つ多くの関係者の関心を集めたことであろう。

今次の会議開催は、共通の問題を持つ人々が集まり、仲間を得たことだけでも有意義であった。さらに解決の方向性が見えたことにより、今後の発展も期待される。仕事の都合などで会議を傍聴できなかった博物館・美術館関係者からは、次回の開催を強く期待する声が届いている。

③保存管理の問題は、現在模索中であり、盛んな情報交換が望まれる。

いままで日本で行われてきた保存法は、臭化メチルを使った薫蒸によって虫や黴を殺すものであった。そもそも1980年代以降に建設された博物館・美術館は、空調設備で温度・湿度の管理をし、生物被害に対しては臭化メチルで薫蒸することを前提として設計されてきた。ところが、2005年には臭化メチルの使用が全面的に禁止になることになった。しかも、これに代わる薫蒸法はいまだ開発されていない。あらたな薫蒸剤の開発と同時に、機械や薬品に頼らず、虫・黴を防ぐ保存管理法の開発が急務とされるゆえんである。

民間工芸美術は、元来生物被害を受けやすい材質のことが多い。場所によっては、厳しい気象条件のなかで、様々な民間工芸美術が保存されてきたが、民間工芸美術の保存法についての情報は少ない。今次会議の開催により、おおやけに取り上げて議論されることもなく、保管担当者が個人のレベルで考え、悩み、試行錯誤している現状が浮き彫りとなった。民間工芸美術に関する情報の公開・交換・交流が強く望まれる。

④伝統的な保存法が報告された。

ベトナム・フエの伝統的な保存法や、中国・山西省の蒐集品の保存例は、貴重な情報

であった。詳しくは座談会でのフン・ディン・ケット氏の発言や段改芳氏の報告を参照されたい。

⑤広く一般社会にも訴えた会議であった。

今次会議の開催は、DMやチラシ・ポスターの他に、インターネット上でもニュースが流された。これらの宣伝手段により、幅広い層にこの会議が知らされた。主催者側とは一面識もない博物館・美術館の学藝員や研究者が、会議に参加した。また、博物館学・民俗学・比較文化論・美術などを専攻する学部生や院生、民間工芸美術を愛好する一般市民もこの会議に参加して、貴重な報告や座談会を傍聴した。

2日間の会議は両日ともほぼ満員となった。のべにすると160人余になる。一般の参加者も関心が深く、2日間の会議を続けて聴講した人が多かった。会場を大学や研究機関ではなく、一般市民に開放された区役所の文化施設にしたこと、参加しやすい交通至便な場所を選んだことも、大きな成果を挙げる要因となったとおぼしい。

#### [追記]

博物館・美術館の保存・展示に関する会議でありながら、収蔵庫や展示室の温度・湿度などの環境に関するデータを公表することができない館があった。これは博物館・美術館が抱える問題を公開で検討する際には、必ず表面化する障害の一つと思われる。どこの館もおおやけにされては困る問題を抱えているのが現状と思われる。館の保存状態を赤裸々に報告するわけにはゆかず、会場からの質問に対し、「理想的」な保存状態を答えた館もあった。問題点を隠蔽することによる弊害は

少なくあるまい。保存条件を改善する余力がない館が多いという現状を確認したことも、今次会議の成果といえよう。

#### おわりに

最後に、ご協力いただいた各方面、各位に衷心よりお礼を申し上げたい。特にACCUの大井剛氏には企画の素案の段階から報告書の作成まで、親身にお世話いただいたことを、ここに銘記しておきたい。